

Kouzo Takeuchi

竹内 紘三



Ishoken
www.ishoken.jp

2021年10月にishoken galleryで展覧会を開催した卒業生の竹内紘三さん(第44期技術コース修了)にお話をお聞きました。

—— ishoken gallery での展示が始まりましたがいかがですか？

卒業して18年経つので、かなり懐かしさがあります。自分が当時どうしているかを考えていたのか振り返る良い機会になったし、研究生と話をしたりすると当時のことを思い出します。

—— どのような展示にしようと考えていましたか？

自身の制作の全体像を見せることが一番の目標でした。研究生やお世話になった方々にも見てもらえる場ですし、自分なりにある程度出来上がった形を出せる良いタイミングでした。改めて自分の中で考える一つのきっかけになりそうです。



ishoken galleryでの展示 (2021年)

—— 竹内さんの独特な作品はどのようにして生まれたのですか？

作家として制作を始めた頃、自分が本当に何を表現したいのか悩む過程で今の作品が始まったように思います。やっぱり自分は幾何形態を組み合わせたような形が好きなので、自分の好きなものに素直に取り組みました。そして制作中に作品を落とすというアクシデントがあって、その時に割れた形が面白くなって気づいたんです。それで最初は少し怖かったけどやってみました。

—— 作品を“割る”ということは特徴的ですね。

続けていくとコンペにも入ったり、次第に周りからも「いいね」と言われたり。その反面「割れているじゃないか」とも言われましたし、他の作家さんの作品と比べられるようなこともありました。でも、自分がやりたいことをどこまでやれるかということで始めたことなので、当時は何を言われても平気だったし、他人の反応よりも何より自分が納得できるかということが一番大きなことでした。他人の意見はさほど気にはなりません。落としたアクシデントが作品に繋がったのは、自分の気持ちや準備、タイミングとか様々なことが良い状態で重なっていたからだと思います。それに気付けたことはとても幸運でした。

—— 竹内さんが感じる陶磁器の魅力とは何ですか？

陶磁器の存在感というか、焼成することで作り手の意図を超えた所にあるモノになるという特性がとても特異な素材だと思います。磁器の白い作品で言えばやきものならではの緊張感を大事にしています。割れたテクスチャーは、磁器の素材感を強く出せて、尚且つ緊張感も含ませることの出来る部分なので私にとっては大きな魅力です。黒い陶器の作品では、表面に砂をまぶして焼成し、焼き上がったから表面の砂を取り除いて、表情を出しています。これもまた、やきものというものの懐の深さを感じる面白いところだと思っています。そして木やガラス、石材など異素材を組み合わせた作品では、陶磁器を異素材と対比することにより、やきものらしさや、それぞれの素材の面白さがよりはっきり見えてくると感じています。

—— そもそもやきものを始めたきっかけは？

大学ではデザイン科に進みたかったけど叫わなくて、それで工芸学科に入って土を触りだしたら面白くて。デザイン科は図面を描いてもなかなか実物にならない。陶芸は自分が思い描くものがそのまま自分の手で作れるので平面で考えるより考えた立体が直で作れる、それがとても面白くて。

—— それで陶芸に進んだのですか？

あの頃、色々な美術館などで現代陶芸が取り上げられていて、特に著名な作家さんの大型の造形作品などが当時の私にはとてもキラキラ輝いて見えたんです。大阪芸大自体も器より造形を志す人が多くて、先生の影響もありますが、やはり純粋に憧れました。



研究生に授業をする竹内さん

—— 卒業後 ishoken を選んだのは何故ですか？

進路というか続ける方法が見当たらなかったんですが、大学時代の友人が ishoken に通っていて、見学行ったら面白そうだったんです。それともう一つ、大学で造形的な事にハマっていたから、器とか産業とかを全然見てなかったんです。陶芸を続けていくなるとそういうことも深く勉強したいと思ったのが理由です。

—— ishoken 時代はどうでしたか？

同期の仲間が聞いたら怒るかもしれないけど、大学から陶芸をやってきたこともあって、制作することに自信もありました。この中で自分が一番濃い奴になりたい、みたいな思いはありましたね。最初から絶対にみんなには負けたくないみたいな。美濃は、陶芸とか産業とか色々なものが入り混じっていて、特に自分は陶芸でやってることしか考えてなかったし、多くの人から色々な事を聞いたことはとても良かったと思っています。反面自分の中でもちゃんと整理するには時間が短くて少し混乱していた時期でもありました。あと自分は結構真面目な研究生だった(笑)。夕方まで授業を受けて、バイトして、その後貸し工房でいたい日が変わるくらいまで制作していました。

—— 印象に残っている授業はありますか？

中島晴美先生の100枚デッサンの授業です。その授業の中で先生が、「やりたいことがあるんやろ？あるなら何故それを描かんや。やりたいことがあるんだったら絵でも形でもいいから表現しろよ。そのためにここに居るんやろ」って熱くて。よく先生の言っていることが自分の中でめっちゃ噛み砕いて落ちたんです。それに同期の仲間もみんな熱かった。喧嘩まではいかなかったけど、毎日色々なことを議論したり、冗談言い合ったりしたり。何かそういうことが凄く居心地良かったし、楽しかった。陶芸とか制作のことしか考えない2年間でした。

—— ishoken を卒業してからはどうしたのですか？

卒業した後は小さな工房で働きながら制作を続けました。でも近い世代の卒業生達がすぐに作家一本で活動しだして、「自分もやれるのじゃないか？いや、やりたい！」って気持ちかなり強くなって行きました。不安なことばかりだったけど、ここまで来れたのは、そんな活躍している友人を横目で意識したり、何か自信というより信念みたいなものだったと思います。



[Modern Remains Meteorite] (2013年) 東京都内ブランドショップの店内に設置された壁面作品

—— それで徐々に作品制作だけでやっていくようになるのですか？

最初の10年、15年くらいは、自分ができることを全部やろうと思っていました。造形作品を作り、器も作り、何か自分が興味あるものを全部やれようかなと思ってやっていた。当時は、できないことがあっても、どうにかしてやってやると思っていて、できないなら何とかできる方法を考え出すんだと思っていました。何でも最初からできるわけじゃないから。

—— 現在ほどのペースで制作をされているのですか？

世代的にもそうだけど、最初は自分から個展をやらせてくださいと持ち込んだりもしましたし、ほんと何でもやっていた。それから来るもの拒まずでやっていたが、3、4年くらい前にちょっと色々な予定が被ってしまっ手が回らなくなって・・・。最近は結構スケジュール見ながらやっています。展覧会は年に3、4回、その間にグループ展を入れたりしています。近年は大型作品のプロジェクトや注文もあるので、それらもふまえて全体的に考えながらスケジュールを立てています。

—— 作品を作る時に心がけていることは何ですか？

細かいことはいっぱいあるけど、納得いくまでは手は止めないことかな。今回の ishoken gallery の展示では新型コロナウイルスの影響で会期が延期になって、良くも悪くも制作時間が伸びたので新しいことを付け加えられるところもありました。いずれにしろ自分は最後の最後まで粘りますね。粘って頑張ったことでちょっと成長するわけで、そうするともうちょっとだけでも良くなるんじゃないかって思うんです。

—— 長く制作を続ける秘訣はありますか？

制作って結構同じようなことを突き詰めていく中で、作品が少しずつ変わっていくんですが、新しい感覚や制作に対するモチベーションやフレキシビリティみたいなものを見つめるところとか、新しいことかな。個人は特にプロジェクションの仕事では、新しい場所での作品の提案もできるとか、今までに無い取り組みとか、そういうことを楽しみながらやっています。

—— 海外での展示も多いと思いますがきっかけは何ですか？

きっかけは ishoken を卒業して2、3年くらい経った時に、アメリカの Keiko Gallery さんに声をかけてもらったことです。「面白いから、アメリカじゃ絶対売れる。いけるよ。」って説得されて。INAXでの展示を見てくれて、急に電話がかかってきてビックリしたことを覚えています。

—— アメリカでの反応はどうでしたか？

どう受け入れられるかなって楽しみではありました。反応は悪くはなかったけど、最初は「何これ」って感じでした。でもそこで買ってくれた人がいたことがかなり大きかったです。日本では一つも売れなかったのに。本人の感性や好みだけで結構高額な作品を購入まで行くマーケットが海外にはあるんだと。当時はアートを取り巻く環境が日本とは全然違うなと思いました。

—— 海外に作品を出したことは良いきっかけだったのですか？

フラットで作品をみても見えるということがある意味新鮮でした。見る方に妙な気持が感じられなくてすごく気持ちが楽でした。自分からどうですかってすぐ聞ける感じとか。日本だと「面白いけどねえ。だけど・・・」って言われるのが悔しかったですね。海外だと面白いことだと信じて活動していけば、思ってた以上にできましたから。それに、先に海外で有名になったら見返りもかなりかかるといふ風には思ってたみたいです(笑)。ただ資金の工面とかは苦労しましたし、当時はオフショアかなくて出品するにも輸送費とか渡航費は自分持ちでした。でも「行きます」って言って、バイトしてお金を貯めたり、なかった時にはどうにか工面してとにかく現地に行くようにしていました。

—— 今後の展望は？

陶芸以外にも面白そうなのがあったら色々チャレンジしてみたいです。やっぱり大学を卒業した頃とかって、自分がどうなるかなって想像すらできなかったし、陶芸が面白くて、何か面白そうなのをやりたいと思ってこういう世界に来たから。

—— これから陶芸を目指す後輩たちに伝えたいことは何ですか？

やきものは楽しいって伝えたい。結局そこが大事なんだから。色々な苦労や努力があってその上に楽しさがあるんだけど、とにかくポジティブに諦めずに精一杯やろうってこと。自分で選んでやっているわけだから楽しくないわけがないですよ。



[現観-緑-] (2021年) 空間設計: 一盤十間 撮影: 梶越圭晋/エスエス



竹内 紘三

1977年兵庫県加東市生まれ。
2001年大阪芸術大学工芸学科陶芸コース卒業、2003年多治見市陶磁器意匠研究所修了。
個展や企画展、アートフェアなど国内外で作品を発表。
作品はボストン美術館、ビクトリア・アンド・アルバート美術館、チェルヌスキ美術館、兵庫陶芸美術館など多数収蔵されている。
主な受賞歴に、第27回長三賞現代陶芸展奨励賞、神戸ビエンナーレ現代陶芸コンペティション奨励賞など。